

末黒野

すぐろの

11月号 (通巻783号)



青 虫

小川玉泉

雨あとの土やはらかし草を引く
一列にみんなみんな縫り桜樹老ゆ
敷石に紅吹かれをり百日紅
球形に仕立て盛りの百日紅

炎帝にかしづく思ひメロン切る
よく冷えしハウスみかんや夜の秋
葉の先の炎暑の疲れ大櫂
酔芙蓉葉の青虫の深みどり
穂芒や転轍機なき操車場
うすく剥く二十世紀の皮青き
音立つること憚られ月鈴子
蝸の声の消え入り夕まぐれ

素

秋

松本三千夫

新涼や飲めぬ洋酒の壘並べ
アメリカもある方位盤真葛原
萩揺るる夕べのいろを影持ちて
萩詠める芭蕉の句碑や萩こぼれ
海底の藻のごとく揺れ竹の春
木槿垣鶏が鶏追ふ縁の先
柳散る一晷ほどの石橋に
鶏頭や寺の耳門の少し開き
野に佇つや殊に秋めく山の音
森を歩き野をゆき秋思捨てきれず
秋天や炭焼小屋は錠鎖して
秋の蚊を打てば頬鳴る不覚かな

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

晩涼

清海信子

夕涼しオクラ刻めば星のごと
炎昼の肌へ沁み入る溪の音
万緑の虜となりし峡泊り
子と端居槓の威容を言ひ合へり
胸の手の涼しく明けて水の音
弾みつつ罔を張る蜘蛛を見て居りぬ
過疎の村大ひまはりの林立す
夏瘦せを励まし合うて別れけり
大榆の葉擦れに夏の過ぎゆけり
晩涼や座り直して夜風聞く

夏神楽

黒滝志麻子

泉湧く森の冥さを抜けて海
海亀の去るや波打際の寂
喉ごしの山水あまし夏神楽
病葉や雲うごかざる切通し
連山の靄のかかるや青葡萄
亀の子の渚へむかふ夜明けかな
石段の縫ふ磯部落蟬時雨
焼茄子津軽の訛飛び交うて
余り湯の湯気白々と夕化粧
抜け道の崖になだるる葛の花



乙矢集

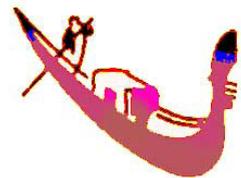
配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

盆 路 菅野 蒔子

青葉木菟 城戸 緑

鉾揃ふ一山の杉炎天下
水音の流れは見えず谷青葉
追ひついて共にはじける大花火
空覆ふ真砂七いろ揚花火
子と孫の集ひふくらむ盆の家
盆路の凸凹地震の傷深し
送り火や仕事に戻る子と家族

白南風や展帆の船駆くると
宿の灯のほかは星のみ青葉木菟
紺碧の空を侵しつ雲の峰
読み終へし句集の余韻遠花火
耳奥に残る潮騒籐寝椅子
雨あとの香の濃くなりぬ蚊遣香
夏の果灯す会津の絵らふそく



晩夏 熊切光子

草叢の草より出でて忘れ草
めまとひを払ひながの会釈かな
わけもなく吠え付く犬や油照り
廃屋を抜くる西日や曼陀羅華
晩夏光阿修羅の像の面寂びて
青柿の青透く風の夕べかな
五畝ほどの青田の風や町ともり

花ふくべ 鈴木一三

雉子鳩のくぐもり啼くや土用寒
隣家の夜干しの梅の香に眠る
無駄花の多きふくべや迷ひ蔓
庭石の渴きするりと蜥蜴呑む
歳時記の朶を移す夏の果
捨て惜しむ農具の錆や暮の夏
相州に生れ育ちて衣被

三蓋松 堺昌子

風さそふ昔ながらの釣忍
築山の三蓋松や緑濃し
馬鈴薯の届きふる里近うせり
白南風の波や松生ふ岬の鼻
夕照や玫瑰の実の赤々と
若人の指先揃ひ盆踊り
母逝きて七とせ里の星まつり

登山道 西川みほ

茶の青葉のび放題や地震あと
熊除けの鈴の銜や登山道
三猿像頭隠さず灼けてをり
片陰や税の続く海野宿
葎簀吊る気取らぬ里の暮しかな
岸壁の緑陰ベンチ睡魔来る
魂送る母がりの里過疎めきぬ

青炎集

横浜 高橋 明

一枝も力ゆるめず夏木立
急流にはつしと棹や夏燕
草丈に子供ら沈み捕虫網
爪先を余し足袋はく祭の子
片蔭へ話の続き移しけり
夕焼けへ翳す水割グラスかな

横須賀 大川 暉美

手花火や並ぶ親子の膝小僧
担ぎ手の足の踊れる神輿かな
潮風に暫し子達と藍浴衣
亡き兄の手彫り能面夏座敷
初秋や棚田百枚風渡る
菜園の恵み豊かや茄子の馬

小川玉泉選

横浜 高橋 定峰

泳ぎ来て岩に腹這ふ秩父の子
みどりさすウエストン 卿碑上高地
熊除けの鈴の高鳴り夏の霧
うつせみの確と抱けり開墾碑
宿裏の土橋にかがみ聞く河鹿
並べ書く子の名の二人流灯会

横浜 和田 慈子

塩味を効かせ大暑の握り飯
滝しぶき一刻の涼たまはりぬ
灼熱の空軋ませてモノレール
沸き出でし祭囃子や島の屋
渡御進む島の男の威勢かな
黒光る肌や競ひて荒神輿



横浜 熊切 修

浮かびては消し去る一語水すまし

満月の光を増しぬほととぎす

本堂の屋根の夏草風さわぐ

日盛りを苔噴きて立つ大櫓

雨あとの日差しに濡るる蟬の殻

蟬声の調べ定まるまでの隙

横浜 岡本ヨシエ

曇天の池を明るく半夏生草

街路樹に提灯のこり祭果つ

潮の香の路地裏涼し漁師町

恰好の日除となりぬゴーヤ棚

砂利道を踏みしむる朝蓮の花

岨道に咲きつき桔梗をみなめし

横浜 青木由芙

玉虫の羽のまぶしき籬かな

幼子の列よりはづれ盆踊

大甕の蓮匂ひぬ朝の庫裏

暫くは匙の音のみかき氷

巖を呑みうねりて寄する土用波

空蟬の縦一列の大樹かな

新宿 稲垣佳子

今年又賤のままの土用干

提灯屋の筆のなぞりや葎簾

草原を声の散らばり夏帽子

連発の花火や子等の口を開け

千の音に出会ふ風鈴まつりかな

叢雲を出でては隠れ居待月

横浜 根本公子

片蔭を譲られ淡きコロンの香

凌霄の落花色増す憂き日かな

山裾の風の足跡青田波

幽谷の白煙けぶる滝の音

蟬時雨余白の多き時刻表

糠床に糠をつぎ足す今朝の秋

横浜 松浦哲夫

佐渡暮れて能楽堂の灯の涼し

日本海閘を借り切る烏賊釣火

河童忌や仏陀の垂るる蜘蛛の糸

酔の物に香の物添へ夏料理

領収書要らぬ暮しや冷酒酌む

炎昼や路面電車の軋む声

